

## 草双紙伝記の世界——西南戦争期の西郷隆盛伝

森岡優紀

二〇二二年春、筆者は鹿児島から熊本に向けて点在する西南戦争の戦役跡を辿った。かつて熊本鎮台が置かれた熊本城は壮大であり、攻め落とされずに薩摩軍を退却させた姿を留めている。熊本近郊の激戦地、田原坂は春もたけなわであり、小高い山の裾野には小さな村が点在し、満開を迎えようとする桜を見に散策する人が行き交っていた。

明治一〇年の西南戦争の勃発とともに、西南戦争の経緯を書いた和装本の小冊子が大量に発行される。これらの冊子は西南戦争の報道記事をまとめたもので、「実録」もしくは「ニュース冊子」と呼ばれている。西南戦争の戦役跡を辿る旅は、小さな和装本や錦絵に描かれた世界の虚実を浮かび上がらせ、興味深いものであった。ここではこれらの冊子類のなかでも、西郷隆盛を取り上げた伝記的な読み物について紹介してみたい。

まず簡単に西南戦争時期に発行された印刷物について紹介してみよう。江戸時代には新聞の前身ともいわれる非合法のかわら版があったが、時事を伝える合法的なメディアは存在していなかった。明治に入ると、政治経済や社会事件などの時事を全国民に伝える新聞が相次いで刊される。しかしこれらの新聞は「大新聞」とも呼ばれ、大量の漢字がふりがなを振らずに使われており、一般庶民は読むことができないものではなかった。明治初期より行われた自署率調査から推測すると、一般の成人男性でもひらがなと簡単な漢字を読むことができるのは全国平

均でせいぜい三、四割前後だったのではないかと思われる。このような状況下で生まれたのは、漢字にふりがなが振ってある「小新聞」や錦絵に報道記事を書き込んだ錦絵新聞であった。そしてこれらのメディアとともに登場したのが「ニュース冊子」である。新聞報道の記事のなかで、ある事件をビックアップし、漢字にふりがなを振るなど読みやすくし、事件の経緯をまとめた小冊子である。明治七年の台湾出兵頃から発行され始め、熊本神風連の乱、秋月の乱、萩の乱などの土族の反乱を題材にして増加し、明治一〇年の西南戦争で激増する。冊子には、文字だけのものから、数枚の挿絵を挟んだもの、毎頁に挿絵があるものなどと様々な体裁がある。西南戦争期には、新聞記事にはない視覚的情報を補うために挿絵が挿入された冊子が徐々に増えていった。また、四角囲みに記事を書いた、大判三枚続の彩色刷りの錦絵も多く発行されている。これらの錦絵は「西南戦争錦絵」とも呼ばれており、新聞記事をもとにしている点や人々に視覚的情報を与えるという点では冊子類と共通した目的をもっており、また冊子類と版元、作者、絵師が共通していた。

それでは、ここで本題となる明治一〇年から一一年初までに出版された西郷隆盛の伝記を紹介してみよう。西南戦争期の「ニュース冊子」は一〇〇冊近くに上る。そのなかで西郷隆盛の伝記的読み物は、管見の限りでは一二冊、西南戦争の司令官等の草双紙風の人物列伝などは三冊出版されている。紙面の幅もあるので、そのなかの点数を取り上げてみたい。

早川徳之助編輯、松月保誠画『絵本西郷一代記』（小森宗次郎出版、一八七七年）。毎頁ごとに絵が挿入される草双紙風の伝記となっている。彩色刷りの摺付表紙がついており、書型は中本。毎号の値段は三銭とある。当時、大判三枚続の西南戦争錦絵は六銭で売られていた。六銭は米一升が買える値段に相当したことを考えると、三銭の冊子もそれほど安くはない値段であ

る。編輯人は早川徳之助、絵は松月保誠、出版人は小森宗次郎と書かれている。編輯人の早川徳之助と絵師の松月保誠は同一人物であり、「早川松山」の名で知られている浮世絵師である。このように浮世絵師が編者として署名をする場合も多く、その場合には元本が存在することが多い。『絵本西郷一代記』が参照したのは山本園衛の『西郷隆盛蓋棺記』である。一号から一四号まで発行され、一号から六号は一〇月二九日御届、七号から一四号は十二月三日御届であり、西南戦争が終結した後作成されている。内容は、一号から四号が西郷隆盛の誕生から征韓論を経て野に下るまで、五号から一四号は私学校学生による火薬庫襲撃事件から西郷隆盛の死までである。以上のように、半分以上が西南戦争の記述に費やされている。西南戦争以後の記述は、西郷の言動よりも西南戦争の経緯、戦役の状況、戦役でのエピソードが書かれている。

挿絵(図一)には私学校の「賊徒等製造の場所」にきたりて火薬を掠奪なさんと欲す」という題がついている。しかし、本文



図一 『絵本西郷一代記』七号 (出典：国立国会図書館：<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/884474>)

は既に薩摩軍と官軍が熊本とその近郊で戦闘を始め、勝敗がつかない状態であることが書かれている。火薬庫襲撃事件に関しては二号前の五号に書かれており、その頁の挿絵には「会津白虎隊切腹の図」が描かれている。このように本文と挿絵が全く合っていない。挿絵を一気に描き、その後本文を書き入れたが、思ったよりも本文の分量が多く、挿絵と本文がずれてしまったのであろう。挿絵は西南戦争錦絵などをヒントにして、それをアレンジして描かれたと思われる。図二の錦絵は明治一〇年二月八日の夜に私学校が県庁を襲った図である。人物の動きや服装などがそっくりである。このように冊子は粗雑な作りであるが、時事に即した新しい内容に挿絵が添えられ、古い「一代記」が一新されている。

次に、西野古海編、絵師未詳『鹿児島英雄銘々伝』（木村文三郎出版、一八七七年八月九日御届、九月発行）を紹介してみよう。『絵本西郷一代記』が人物の一生を物語風に綴った長編伝記の「一代記」の体裁を借りたものだとすると、『鹿児島英雄



図二 月岡芳年「新聞鹿児島模写」明治一〇年二月一九日御届 (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1307877>)



図四 山崎年信「鹿児島記聞：川尻本営図」明治一〇年四月一九日御届 (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1307889>)



図三 『鹿児島英雄銘々伝』の「西郷隆盛」(<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/884712>)

銘々伝』は「銘々伝」という短編伝記の体裁を襲っている。『鹿児島英雄銘々伝』は毎頁ごとに一人が紹介されており、「西郷隆盛」から始まり、次は「篠原国幹」、「村田新八」と続く。このような「銘々伝」の形式を取った伝記は西南戦争以外でも多く出版されており、明治以降には桜田門外の変、明治維新の志士の銘々伝が出版されている。興味深いのは、西郷隆盛が現在一般的に知られている姿とは全く異なる姿で描かれていることである。

西郷隆盛(図三、図四)はナポレオン帽とも呼ばれる二角帽子をかぶり、儀式に参加する際の大礼服を着用し、かつ髭を生やしている。西南戦争錦絵にも同じ姿の西郷隆盛の肖像がよく見られる。西郷隆盛の横の逸見十郎太(辺見十郎太)や別府新助(別府晋介)は和装で描かれている。また篠原国幹や桐野利秋等も鎧姿や和服で描かれることが多く、西



図五 『鹿兒島美勇伝』の「西郷隆盛」と「有栖川宮職仁親王」  
 (https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/884726)

郷隆盛のみが大礼服で戦場に立つ姿が描かれ、かつて政府高官であったことを際立たせている。もちろん錦絵に描かれた大礼服姿の西郷は想像で描かれたもので、当時西郷が着用したとされる陸軍大將軍服もこれほど煌びやかな服ではない。ナポレオンを思い浮かべさせる二角帽

は後の礼服に用いられることがあったが、西南戦争中にかぶっていたとは考えられない。当時の薩摩軍司令官の服装は薩摩藩で流行したフェルト帽に、上衣は和服を半マントルに、下衣も和服をズボンに作り直したという質素なものであった。このように西郷隆盛は「逆賊」と呼ばれながらも、官軍さながらの姿で描かれており、西郷への敬意が表されている。

次に、大西庄之助、絵師末詳『鹿兒島美勇伝』（一号〜三号、大西庄之助出版、一八七七年一〇月二二日御届）を紹介しよう（図五）。西南戦争開始から間もない三月二二日に一、二号の御届が出された後、一月の一六号まで出版され、様々な人物を紹介している。また一〇月一号から三号が再販されており、人気の高

さが窺われる。『鹿児島英雄銘々伝』が一人物一頁で紹介していたのに対し、『鹿児島美勇伝』は見開きの各頁に二人の人物を対にして描いている。これは「英雄くらべ」とも呼ばれる体裁を借りたものである。右の頁には征討総督として出征した有栖川宮熾仁親王、左の頁には西郷隆盛が載っている。有栖川宮熾仁親王は和装で、西郷隆盛はやはり大礼服である。実は、西南戦争に対し最も関心を寄せたのは士族であり、一般庶民にとって西南戦争は士族同士の争いと感じられており、東京や大阪などの安全な場所からの高みの見物だったのではないとも言われている。同時期に『西南人名一覽』という西南戦争の司令官やその妻を百人一首風のカードにした冊子も発売されており、序文には秋の夜長の無聊を慰めるために作ったとある。この本も同様に愉まれたのであろう。

以上、西南戦争期の西郷隆盛伝を紹介した。これらの冊子の特徴は、江戸時代に御法度だった政治的時事的な人物を題材とした新しさと、戯作風の古い体裁という点にある。近代移行期にはこのような近代的な新しい発想を古い形式で表現するという現象がよく見られる。近世において錦絵は美人画や名所絵などに制限されていたが、西南戦争では戦役の一場面を描き、新聞報道に欠けていた視覚的情報を提供した。また、時事にまつわる人物を取り上げることがタブーであった伝記も、西郷隆盛のような現在進行形で進む事件の主人公を題材にして書かれるようになっていく。このように、西南戦争期に出版された西郷隆盛伝は、時事にまつわる人物を描く端緒を作り、幅広い層に読まれたのである。

(日本学術振興会特別研究員／国際日本文化研究センター外来研究員)